

# 『王侯の没落』におけるFortuneの中世的寓意と 彼女の呼称 ‘goddesse’ の意義

—— 原典との比較研究の観点から ——

轟 義 昭

## 序

ジョン・リドゲイト (John Lydgate) の『王侯の没落』(*Fall of Princes* 以下、『没落』)<sup>1</sup> は有名な王侯貴族を主人公とする中世的悲劇物語集である。この作品は、ジョヴァンニ・ボッカッチョ (Giovanni Boccaccio) がラテン語で書いた『名士列伝』(*De casibus virorum illustrium*) をロラン・ド・ブルミエフェ (Laurent de Premierfait) が中世フランス語散文 *Des cas des nobles hommes et femmes* に翻訳し、その敷衍された第二版を拠り所として書かれた翻案である。筆者はParis版 (ラテン語テキスト)<sup>2</sup> とHenry Bergenが注釈に用いたLe Noir版とCouteau版 (中世フランス語テキスト)<sup>3</sup> を利用して、『没落』第三巻のFortuneと ‘Glad Pouert’ (満足貧乏) の争い場面および第六巻のFortuneと ‘Bocas’ の対談場面との比較を試みた。Fortuneの寓意の宝庫と呼ぶに値する双方の箇所では、すべての寓意要素を対象にする余裕はなく、本稿では、第六巻の470行目から483行目に焦点を当てる。この14行は、リドゲイトがFortuneの中世的寓意を形成していく過程において、修道士としての彼の心がどのように現れているかを、限られた紙面で、問題提起できる最適な箇所だと思ったからである。

## I. 翻案の問題点

### 1. 表現の表舞台に現れたボッカッチョ

『名士列伝』の原典が下敷きであるために、翻案のなかでも、原作者ボッカッチョの姿が言語表現の表舞台に現れてくる。

#### (1) Bocas, Bocas, I parceyue eueri thyng

And knowe ful weel the grete difference  
Hid in thi-silff of woordes & thynkyng,  
Atween hem bothe the disconvenience.  
Hastow nat write many gret sentence

In thi book to sclandre with my name,  
Off hool entent my maneres to diffame?

Thou callest me stepmooder most vnkynde,  
And sumtyme a fals enchaunteresse,  
A mermaide with a tail behynde,  
Off scorn sumwhile me namyng a goddessse,  
Sumtyme a wich, sumtyme a sorceresse,  
Fyndere off moordre & of deceitis alle;  
Thus of malis mortel men me calle! (VI. 470 - 483)

470行目において語り手の‘I’、即ち、Fortuneが‘Bocas, Bocas’と呼び掛けているので、472行目の再帰代名詞‘thi-silff’はボッカッチョということになる。語り手は「汝の心の中に隠された思いと言葉双方の間にある大きな相違・矛盾」を認識している。明確に言えば、『没落』のなかで Fortune に対して攻撃的な言葉—例えば、477行目以下にある‘stepmooder’‘enchaunteresse’‘mermaide’‘wich’‘sorceresse’‘Fyndere off moordre & of deceitis alle’の毒舌—を用いて彼女の名前を誹謗‘sclandre’し、彼女の作法を侮辱‘diffame’し、「女神様」と軽蔑を込めて呼ぶ一方で、この作品を世に広めたいという気持ちから Fortune に優しく懇願する‘Bocas’の‘woordes’と‘thynkyng’の相違・矛盾を対話の語り手は認識しているのである。

## 2. 問題点の確認

ここで問題とすべきは、本文中の‘woordes’、即ち、Fortuneへの毒舌は文字どおり‘Bocas’の発した言葉であると素直に取るべきなのか、それとも、『没落』は翻案なので、それは表現しているリドゲイトの言葉であると取るべきなのかどうかである。同様に、Fortuneを‘goddessse’と呼ぶことに軽蔑的な感情を抱いたのは‘Bocas’なのか、それとも、リドゲイトなのかどうかである。前者の「読み」を支持すれば、リドゲイトは翻案という形で原作者ボッカッチョの Fortune に対する見解を紹介しているにすぎないことになる。こうなると、「読む行為」は単純化してしまい、「読み手」が想像力を駆使してリドゲイトの Fortune に対する見解を構築することは容易でない。では、後者の「読み」を支持すればどうだろうか。「読み手」には、リドゲイトが表現する‘woordes’のなかに、原作者の意図が含まれている場合と排除されている場合とを考慮するように求められるだろう。「言葉」のなかに原作者の意図が含まれていると思うならば、リドゲイトは Fortune の問題に対して原作者と同じような姿勢を取っていると判断することになる。即ち、原作者の姿が言語表現の表舞台に現れているけれど、その裏にリドゲ

イトの心が潜んでいると考えることになるだろう。しかしながら、双方の見解が本当に同一なのかどうかと疑問を抱くならば、原作者の姿がちらつき、「読み手」はその存在に惑わされて、リドゲイト自身のFortune問題の取り扱いに確証がもてないままになる。「言葉」のなかに原作者の意図が排除されていると思うならば、「読み手」は言語表現の表舞台に現れた原作者の姿に恐れることなく、表現された「言葉」からリドゲイト自身のFortuneに対する見解を難なく構築できるだろう。こうなると、同一詩人が創り出した作品間には深い相互関係が存在するという考え方<sup>4</sup>を適用することができ、詩人リドゲイトの作品間での運命観の展開探究も可能となる。

以上のように、『没落』は翻案なので、‘Bocas’ という語句があるだけで、「読み手」は言葉のもつ不確かさによって「読む行為」の複雑な迷路に迷い込んでしまう恐れがあり、言葉の真意を推測して進まざるを得なくなる。そこで、本稿では(1)に関してボッカッチョの原典とリドゲイトが拠り所とした中世フランス語散文訳(以下、仏語訳)との比較を試みて、解釈の曖昧さを無くす作業から始める。その上で、Fortuneへの毒舌の語句に込められた作者リドゲイトの心を明らかにしたい。同時に、480行目の記述から、彼の「女神」観についても考察したい。

## II. 原典と中世フランス語散文訳との比較

### 1. 比較研究の価値

運命の寓意に着目した研究のなかでは、H. R. Patchと黒瀬を無視できない。Patchは『中世文学における運命の女神』<sup>5</sup>のなかで、運命の女神に関する豊富な記述を活用して、新プラトン学派の哲学とキリスト教神学との関係を重視した立場から、運命の寓意の史的变化を考察した。一方、黒瀬は歴史観と時代意識を背景とした立場から、その史的变化を考察した。なかでも、リドゲイトの作品に関する彼の著書<sup>6</sup>は「鉄の時代の運命の女神」という画期的な理論を展開したことで注目に値する。しかしながら、両者とも、『名士列伝』と『没落』を同時に取り上げて、Fortuneの寓意形成におけるボッカッチョとリドゲイトの相違を比較研究の観点から論述していない。

### 2. 比較考察とその結果

まず、(1)に相当する原典と仏語訳の箇所を記述しよう。

(2) Nec tu credis aduertam quantum aduersus me mente distes a verbis. Memini quibus ignominiis/ quibus blasphemiis/ quibus execrationibus/ si potuisses me lacessiueris olim. Nunc stolidam vocans/ nunc orbam nunc Inuidam/ Homicidam/ Inimicam/ Nouercamque eo quod ineptas cupiditates tuas hactenus non expleuerim...<sup>7</sup> (p. 142)

(3) ie appercoy bien Iehan boccace quelle difference il a de toy a moy en pensee et aussi en parler/ et me souvient bien comme tu mas courroucee en langage de ton liure present en moy diffamant/ blasmant et mauldissant se tu peusses. Auec ce tu me appelles sottte a lune des fois/ lautre fois aueugle et enuieuse/ ou meurtriere/ ou ennemye/ ou marastre/ pource que iusques cy ie nay pas acomply tes couuoitises folles et desaduenans...<sup>8</sup> (p. 250)

(2) の原典において ‘mente’ ‘verbis’ の語句に示されるように、ボッカッチョにはFortune に対する「思い」と彼女に用いる「言葉」の間で相違が生じていることを我々は知る。「思い」とは、(1) の解説で示したように、*De casibus*を世に広めたいとFortuneに優しく懇願する原作者の思いを指している。「言葉」と言えば、それはFortuneが憤慨するような屈辱的な ‘ignomiis’ 言葉、冒瀆的な ‘blasphemiis’ 言葉、呪いの ‘execrationibus’ 言葉であり、具体的には、‘solidam’ 「愚か者」、‘orbam’ 「孤児」、‘Inuidam’ 「嫉妬深い人」、‘Homicidam’ 「殺人者」、‘Inimicam’ 「敵対者」、‘Nouercam’ 「継母」のような毒舌である。このようなFortuneへの毒舌は、彼女が原作者の様々な愚かな欲望 ‘ineptas cupiditates’ を満足させない時に、原作者によって腹いせに発せられた言葉のようである。

プルミエフェは原作者の趣旨をどのように翻訳しているだろうか。(3) の仏語訳では、(1) の引用文のように、対話の「語り手」である ‘ie’ が ‘Iehan boccace’ と呼び掛ける形が取られている。「語り手」は ‘toy’ の心のなかに「私に対する ‘pensee’ と (私に用いる) ‘parler’ とに相違がある」ことを認識している。‘pensee’ とは*Des cas*を世に広めたいという ‘toy’ の「思い」であり、‘parler’ とはFortuneが憤慨するような侮辱的で ‘diffamant’、非難的で ‘blasmant’、呪いの ‘mauldissant」 「言葉」である。具体的には ‘sottte’ 「愚か者」、‘aueugle」 「盲人」、‘enuieuse」 「嫉妬深い人」、‘meutriere」 「殺人者」、‘ennemye」 「敵対者」、‘marastre」 「継母」のような毒舌である。このような毒舌がFortuneに発せられるのは、彼女に対する ‘toy’ の途方もない欲望からのようである。

上述の分析を踏まえて、運命の寓意を支える語句を整理すると、次の表のようになる。

原典	仏語訳	翻案
stolidam	sottte	_____
orbam	_____	_____
Inuidam	enuieuse	_____
Homicidam	meutriere	Fyndere off moordre & deceitis alle
Inimicam	ennemye	_____
Nouercam	marastre	stepmooder most vnkynde
_____	aueugle	_____
_____	_____	fals enchaunteresse
_____	_____	mermaide
_____	_____	wich
_____	_____	sorceresse

この対照表によると、原典に記述されていた‘orbam’がどのような経緯で‘aueugle’に転換されたのだろうかという疑問はさておき、プルミエフェは原作者のFortuneへの毒舌の語句をほぼ正確に中世フランス語に置き換えていることが判明する。他方、リドゲイトもFortuneに対する中傷的・誹謗的な6つの「言葉」を記述している。そのなかで、‘Fyndere off moordre’ ‘stepmooder’の中英語は原語に対応するが、‘enchaunteresse’ ‘mermaide’ ‘wich’ ‘sorceresse’の中英語は原語に対応しない。つまり、それらはリドゲイト独自の発想に基づく表現であることが判明する。

この事実から次のような結論を導き出すことができる。

[A] 原語と対応する中英語が二語あるので、リドゲイトが表現する‘woordes’から原作者の意図を排除することはできない。ただし、‘stepmooder’に‘most vnkynde’の形容辞が冠せられたり、‘Homicidam」 「殺人者」が‘Fyndere off moordre」 「殺人の扇動者」に改められていることから、その二語にもFortuneに対するリドゲイトの独自の視点を感じられる。

[B] Fortuneへの毒舌の内容が原典と翻案とではかなり異なることから、リドゲイトはFortuneの寓意形成に対して原作者と同一姿勢というわけではない。即ち、リドゲイトは原作者のFortuneに対する観念を昇華して、独自の視点からFortuneの問題に取り組もうとしている傾向が見られる。

### III. 運命の寓意形成に選択された語句について

第二章では、原典と仏語訳と翻案の比較によって、‘Bocas’の「言葉」に隠れたリドゲイトの存在を垣間見ることができた。ここでは、選択された運命の寓意形成の語句に潜むリドゲイトの心について考察する。

#### 「継母」と「殺人の扇動者」

『没落』において‘stepmooder’ ‘Fyndere off moordre’の使用例を吟味して、その語句に対するリドゲイトの意識を探ろう。‘stepmooder’に関しては、7例の使用が見出される（I. 2348, I. 2370, I. 4811, II. 643, III. 3980, IV. 151, V. 3047）。このなかで、後の5例は注目に値する。

(4) Hasti credence is roote off al errour,

A forward stepmooder off al good counsail, (I. 4810 - 4811)

(5) To bleende hym falsli with ther flat[e]rie,

Which is a stepmooder callid in substaunce

To al vertu and al good gouernaunce. (II. 642 - 644)

(6) Wil is a stepmooder of witt & of resoun; (III. 3980)

(7) Necligence and forward idilnesse, —

Echon stepmooder to science and konnyng, (IV. 150 - 151)

(8) And couetise is contrarious

Vnto knihthood, as auctours alle expresse,

And stepmooder vnto worthynesse. (V. 3045 - 3047)

「軽率な信用は適切な忠告の強情な継母」「甘言は美德と立派な統治の継母」「意欲は知恵と理性の継母」「怠慢と強情な怠惰は知識と学問の継母」「食欲は尊厳の継母」のように、「継母」という語をキリスト教悪と結び付けて使用する特徴がリドゲイトには認められる。

‘Fyndere off moordre’ に関してはどうか。‘Maistresse of moordre’ (III. 4279), ‘A fals moordrer’ (IX. 1426) のような語句の使用は見出せるが、残念ながら、この用例は『没落』には見当たらない。‘moordre’ がキリスト教に反する罪悪<sup>9</sup>であることは言うまでもないので、‘Fyndere off’ の表現形式に着目すると、Nimrodを「邪教の創始者」、Atreusを「裏切りと欺瞞の扇動者」とみなすような用例がある。

(9) He wix forward off his condicioun,

And was first ground off ydolatrie

And fyndere up off fals relegioun, (I. 1255 - 1257)

(10) Attreus callid, off tresoun sours & well,

And fyndere out off tresoun & falsnesse, (I. 3887 - 3888)

(9) の ‘fyndere’ はinstigator<sup>10</sup>ではなく、founderの意味で用いられているが、いずれにせよ、双方ともキリスト教悪との連語関係を形成している。

Fortuneへの毒舌に用いられた「継母」と「殺人の扇動者」の語句は、原作者からの借用であるかもしれないが、単なる借用ではないことは、上述の用例におけるリドゲイトの言語意識が物語る。言い換えると、この二語の選択にはFortuneを‘Christian Vice’<sup>11</sup>と位置付けようとするリドゲイトの心が込められているのである。

### 「人 魚」

Fortuneを「天使のように微笑む顔をして蛇のような尾鰭を持つ」‘mermaide’ に喩える寓意は、『没落』第六巻の64行目にすでに見られる。

(11) Now a mermaide angelik off face,

A tail behynde verray serpentyne, (VI. 64 - 65)

これは ‘sumwhile...sumwhile’ 構文と ‘now...now’ 構文が用いられて、運命の二面性が強調される51行目から70行目までの表現の一つである。この運命の寓意はリドゲイトの独自の表現

なにかどうか、原典と仏語訳との比較によって確かめてみたい。その際、(11)は43行目の Fortune の衣装に関する記述 ‘Hir habit was of manyfold colours’ と77行目の彼女の足に関する記述 ‘He sempte she hadde no feet upon to gon’ の間にあるので、この部分に相当する原典と仏語訳が比較考察の対象となる。

(12) *Varia vestis. Et ferra vox. Quibus tamen incederet pedibus videre non potui.*  
(p. 141)

(衣装は多種の色からなり、耳障りな声音の持ち主です。残念ながら、彼女が足で歩いてきたがどうかわかりませんでした。)

(13) *Fortune auoit robe de maintes et diuerses couleurs. Car nul homme ne la congnoist. Fortune auoit la voix si aspre & si dure quil sembloit que elle eust bouche de fer/ pource que elle menasse tous les plus grans du monde/ et si met ses menasses a effect. Le aduisay les parties du corps de fortune. Et toutesfois ie ne peuz apperceuoir ne congnoistre les piedz/ parquoy elle alloit.* (p. 246)

(運命の女神の衣装は多種多様な色からできています。これは彼女の存在を気付かせるためです。彼女の声音は耳障りで、高貴な者たちを威嚇するために鉄の口を持っているようです。実際、彼女はその鉄の口で私を威嚇しました。私は身体を観察しましたが、残念ながら、彼女の足を見ることはできませんでした。)

(12) の原典では、Fortuneの多種の色からなる衣装、声の性質、足の存在の有無についての記述があるだけで、Fortuneの二面性の特徴については一言も触れられていない。他方、(13) の仏語訳は、その補足説明が加えられながらも、同様の記述にとどまっている。

このように、比較考察を行うと、(11)は「運命のテーマに取り付かれた」<sup>12</sup> リドゲイトの発想に基づく表現の一手段であることが判明し、479行目以前にFortuneを‘mermaide’と毒づく意識がリドゲイトの心の中に芽生えていたことは確かである。

では、独創的な発想で、彼女を「人魚」に喩える寓意には、彼の如何なる心意が込められているのか。ポッカッチョの面前に出現したFortuneは不思議な姿‘wonderful figure’ (VI. 23)—原典の言葉では‘admirabilis forma’ (p. 141) , 仏語訳では‘la merueilleuse facon’ (p. 246)—をしているが、『没落』のFortuneだけは姿と心が二つに分かれた怪物‘a monstrous ymage, / Partid on tweyne of colour & corage’ (VI. 18 - 19)で、「身体の右側が夏の花々に満ちあふれ、左側が冬の嵐に打ちのめされた」生き物である。

(14) *Hir riht[e] side ful of somer flours,*  
*The tothir oppressid with wynter stormy shours.* (VI. 20 - 21)

一方、「人魚」と言えば、上半身が女性で、下半身が魚体という想像上の生き物、即ち、身体が分裂した動物を我々に連想させる。身体の分裂という共通項に着眼すると、リドゲイトが、‘mermaide’をmonsterとするに適した寓意要素として選択したことも理解できる。

### 「魔法使い」と「魔女」

Fortuneを‘enchaunteresse’に喩える寓意は、『没落』第一巻2058行目‘Than cam Fortune, the fals enchaunteresse’にも見られるが、この寓意は‘chaunteresse’という語句で『没落』以前に制作された『トロイの書』(*Troy Book*)<sup>13</sup>のなかでも確認でき、

- (15) She sodeinly change can her face,  
Smyle a-forn & mowen at þe bak;  
For she vnwarly turned al to wrak,  
Þis chaunteresse & þis stormy quene: (*Troy Book*, V. 632 - 635)

早い段階で、リドゲイトの意識の中に、Fortuneを「魔法使い」とする見方が確立していた。一方、Fortuneを‘sorceresse’に喩える寓意は、

- (16) This lady Fortune doth seelde in oon contune,  
She is so gerrissh of condicioun,  
A sorceresse, a traitour in comune,  
Caste a fals mene to his destruccioun, (IX. 1975 - 1978)

のように、第九巻1977行目に見られるが、第六巻481行目の寓意素材には直接的な影響はない。また、Fortuneを‘wich’に喩える寓意は、『没落』では、第六巻481行目のほかは見当たらない。これらの語彙は、Fortuneが、毒物の調合によって、人間を助けるかと思わせて苦しめるような寓意<sup>14</sup>との関連から容易に想像できるが、語彙形成はチャウサー (Chaucer) の『名声の館』(*The House of Fame*)に依存している可能性が大きい。<sup>15</sup>この点は、『名声の館』の記述を借用して、名声の館をFortuneの屋敷の一部みなし、美名と悪名を轟かせるトランペットを彼女の道具とした新たな寓意形成の派生からも推測される。

- (17) Settest up oon in roiall excellence  
Withynne myn hous callid the Hous of Fame, —  
The goldene trumpet with blastis off good name  
Enhaunceth oon to ful hih[e] parties,  
Wher Iupiter sit among the heuenli skies.  
Anothir trumpet, of sownis ful vengable,  
Which bloweth up at feestis funerall, (VI. 108 - 114)



では、Fortuneを「魔法使い」や「魔女」に喩える寓意には、彼の如何なる心意が込められているのか。中世において「魔女」や「呪術使いの女」は、正統なキリスト教会から異端の烙印を押されて、拷問、火炙りに処せられていた。言い換えると、キリスト教社会において、彼女らは悪魔と同一視され関連付けられたのであった。<sup>16</sup>このような社会状況下において、「魔法使い」や「魔女」のような語句は、修道士リドゲイトにとって、Fortuneを悪魔とみなす格好の寓意要素であったに違いない。

#### IV. Fortuneに用いられた語彙 ‘goddesse’ について

ラテン文芸のなかでFortuneを「女神」とする記述が、‘dea’及び‘diva’という語句によって、頻繁に見出される。<sup>17</sup> Fortuneを女神と呼ぶ伝統的な見方に従えば、480行目の‘goddesse’という語句は、言葉の波に漂う単なる脚韻語として片付けることができるが、第二章での比較考察によって、『没落』にだけ用いられていた事実は無視できない。取り分け、‘off scorn’という副詞句は、Fortuneを女神と呼ぶ場合のリドゲイトの心意を知るのに重要である。何故リドゲイトはFortuneを女神と呼ぶことに軽蔑的な感情を抱いたのだろうか。ここでは、リドゲイトの「女神」観について考察する。

##### 1. 修辭的表現

『没落』において‘goddesse’という語句を調査すると、形容語句で修飾された表現や同格構文による表現を見出せる。<sup>18</sup> 数例を挙げよう。

(18) This stormy queen, this double fals goddesse (III. 153)

(19) But Fortune, the blynde fals goddesse (IV. 3351)

(20) This double goddesse envied at his glorie (VIII. 2868)

Fortuneの性格を表す一つあるいは二つの形容詞が‘goddesse’に冠せられているが、このような「修辭的色合い」‘Colours of rethoryk’<sup>19</sup>は、韻文による中英語作品において珍しくない。文体は人の心(mind)の表れというGeorge Puttenhamの見解<sup>20</sup>に従えば、上述の「文章の色づけをする形容法」にはFortuneに対するリドゲイトの感情が表れていることになる。さすれば、用例のような修辭的表現はFortuneの称号に対する作者の‘curse’(毒舌, 悪態)の表れとする黒瀬の指摘<sup>21</sup>を援用して、リドゲイトがFortuneを女神と呼ぶ際に軽蔑的な感情を抱いたことに我々は納得できる。

##### 2. Fortuneを女神様と呼ぶ人たち

『没落』第六巻のFortuneと‘Bocas’の対談場面のなかで、Fortuneを「女神様」と呼ぶ人たちのことが記されている。

- (21) Yiff I with wyngis myhte fleen to heuene,  
 Ther sholde I see thou hast nothyng to doone  
 With Iubiter nor the planetis seuene,  
 With Phebus, Mars, Mercurie nor the moone.  
 But woorldli foolis, erly, late and soone,  
 Such as be blent & dirkid with leudnesse,  
 Bi fals oppynyoun calle the a goddesse. ( VI. 267 - 273 )

ここで、「語り手」の‘I’は‘Bocas’で、‘thou’はFortuneを指す。「語り手」は翼があつて天翔<sup>あまかけ</sup>ることができれば、‘thou’が7つの惑星とも天帝ジュピターとも一切関係がないことを自ら体験するだろうと語った後、‘the’ (= you) を女神と呼ぶのは、Fortuneに弄ばれる無知で盲目的な人々の誤った判断からであるとの見解を述べる。これはFortuneが理性と思慮を欠いた人々によって崇拜される虚構の神にすぎないとする「語り手」‘I’の運命観を表明したものである。‘I’は文字どおり‘Bocas’なのか、それとも、リドゲイトとしてよいのか。(21)に相当する原典と仏語訳との比較を試みて、解釈の曖昧さを無くそう。

- (22) Agnosco quidem non esse pennas volucres mihi / quarum adiutus suffragio cælos penetrare queam. Ibidem Dei lustraturus arcana. Vt demum mortalibus visa reserem. (p. 141)

(本当に私には飛ぶ翼が無いことを認めます。翼の助けがあれば、天の領域に入り込むこともできたでしょう。そこで神の神秘を観察し、その有様を世間の人々に明らかにしたことでしよう。)

- (23) Je congnois certainement que ie nay pas assez legieres esles pour voller oultre les sept planettes etoultre le hault ciel pour illec enquerir les secretz de dieu / affin que ie les manifeste et dye aux hommes selon ma vision. (p. 248)

(神の神秘を調べて、自らの洞察力によって、そのことを世間の人に明らかにしたいけれど、私には、7つの惑星を越え、高い天空を越えて飛んでいくための、軽い翼がないことは百も承知です。)

(22) の原典は、原作者が、天に飛んでいく翼が無いので、神の神秘を世間の人々に明らかにできないと語る内容である。ここでは、Fortune に関する言及が全くないので、「読み手」は、Fortuneと神 (God) との関係、即ち、

- [1] Fortuneは神と無関係な存在者である。  
 [2] Fortuneはボエティウスの言う宇宙構造の中心をなす神の僕<sup>しもべ</sup>である。<sup>22</sup>  
 [3] Fortuneはダンテの言う「秩序の遂行者や案内者」<sup>23</sup> である。

という彼女の存在論<sup>24</sup>を、「神の神秘」という語句から、想像するように迫られる。他方、(23)の仏語訳は、‘les sept planettes’「7つの惑星」のような語句が付け加えられているが、ほぼ同様の記述にとどまっている。

このように比較考察を行うと、(21)において「Fortuneが7つの惑星とも天帝ジュピターとも一切関係がない」とする記述と「運命に弄ばれる無知で盲目的な人々は、誤った判断から、あなた貴女を女神様と呼びます」という記述は、‘I’の見解ではなくて、表現しているリドゲイトの創作的見解であることが判明する。

### 3. リドゲイトの「女神」観

(21)において、リドゲイトは、Fortuneを星回りの超自然力および天の支配者と関連付けた古代人の異教的解釈<sup>25</sup>を認めないで、Fortuneを‘goddesse’とみなすのは庶民であると言明し、修道士の立場から、Fortuneを虚構の神と位置付けて、彼女の存在を否定・抹殺するキリスト教的解釈を行っている。このような創作的見解は、Fortuneと‘Glad Pouert’（満足貧乏）の争いが描写された『没落』第三巻でも随所に見られ、<sup>26</sup>リドゲイトはFortuneの抹殺論の展開に余念がない。

しかしながら、中世において異教観念が民間に依然として存続し続けていたために、<sup>27</sup>リドゲイトも、『没落』全体のなかでは、彼女の存在を完全に否定できるまでには至っていない。<sup>28</sup>従って、民間信仰の立場を考慮して、Fortuneに異教神の呼称‘goddesse’をとどめさせたが、その語句を用いる際に彼は軽蔑的な感情を込めたのである。

## 結 び

数多くの作家の想像力によって、運命の寓意要素は、他の神々の寓意要素との連鎖反応と融合を繰り返して、新たな寓意が形成され続けた。<sup>29</sup> Patchの言う古典的寓意と中世的寓意という点で、ボッカッチョとリドゲイトのFortuneの寓意形成を比較すると、興味深い事実が浮かび上がる。ボッカッチョは、『名士列伝』のなかでFortuneに百本の手と腕‘Manus, ... centum. Et Brachia totidem’<sup>30</sup> (p. 141) を与えたり、多種の色による衣装を纏わせたりして、中世的寓意に斬新さをもたらすことに成功したが、彼女の肩書きを「世俗物資の管理者’rerum ministra mortalium’<sup>31</sup> (p. 141) とし、Ammianus MarcellinusやPlautusのような古典期のFortuneの様相<sup>32</sup>にとどめたままであった。一方、リドゲイトはFortuneに‘Off chaungis newe ladi & pryncesse’ (VI. 210) という肩書きを与え、古典期のFortuneとは異なる「新たな」変化の貴婦人に脱皮させようとした。その際、彼は修道士としての立場を遺憾なく発揮した。即ち、Fortuneを‘Christian Vice’と位置付ける格好の寓意要素「継母」「殺人の扇動者」をボッカッチョから借用し、怪物とするに適した寓意要素「人魚」を創出し、Fortuneを悪魔とみなす格好の寓意要素「魔法使い」「魔女」を創出したのである。<sup>33</sup>そして、異教神の呼称‘goddesse’を用いる際には軽蔑的な感情を込めたのである。

筆者はParis版とLe Noir版及びCouteau版を用いて比較考察を行い、リドゲイトが、表現を

敷衍する「描写」(description)や「脱線」(digression)という技法を用いて、ボッカッチョのFortuneに対する観念を昇華し、独自の視点からFortuneの問題に取り組んでいることを確信した。本稿では第六巻の470行目から483行目に焦点を当てての考察であるが、中世的寓意と分類されるFortuneに関する特殊な意義には修道士リドゲイトの心が現れていると言っておこう。

## 註

1. Henry Bergen, ed. *Lydgate's Fall of Princes Part I - IV* (1924, 1927; rpt. London: The Early English Text Society, 1967). 以後、この作品からの引用はすべてこの版により、巻と行数のみ本文中に記す。
2. Giovanni Boccaccio, *De Casibus Illustrium Virorum* (Florida: Scholars' Facsimiles & Reprints, 1962). このテキストはL. B. Hallの序文の付き1520年パリ版のファクシミリ製版である。以後、原典からの引用はすべてこの版により、ページ数を本文中に記す。
3. 『没落』第三巻のFortuneと‘Glad Pouert’の争い場面および第六巻のFortuneと‘Bocas’の対談場面については、H. Bergenが*Lydgate's Fall of Princes Part IV*, 182 - 185頁と246 - 250頁にLe Noir版とCouteau版の全文を注釈として掲載している。以後、中世フランス語散文訳からの引用はすべてこの注釈文により、ページ数を本文中に記す。
4. 岡本靖正・川口喬一・外山滋比古編『現代批評理論 第二巻』(研究社, 1988年), 152ページの〈モンテーニュ方式〉のことである。
5. Howard Rollin Patch, *The Goddess Fortuna in Mediaeval Literature* (1927; rpt. New York: Octagon Books, Inc., 1967).
6. Tamotsu Kurose, *Goddess Fortune in John Lydgate's Works* (Sanseido, 1980).
7. 【引用文の大意】お前は私に対する思いと(私に用いる)言葉の間で如何に相違が生じているかなんて考えていない。これまで私がお前の愚かな欲望を満たさなかったからという理由で、私のことを思い起こしては、可能な限り、屈辱的な言葉によって、冒瀆的な言葉によって、呪いの言葉によって、かつて私を激怒させてきた。今や愚か者と誹ったかと思うと、次には孤児とか嫉妬深い人とか殺人者とか敵対者とか継母と誹っていた。
8. 【引用文の大意】ジョン・ボッカッチョよ、私は十分に認識しているぞ。私に対する思いと(私に用いる)言葉の間で如何に相違が生じていることか。また、私のことを十分に思い起こして、この本のなかで、お前が侮辱的で、非難的で、呪いの言葉を用いて、どんなに私を激怒させたことか。これまで私がお前の途方もない食欲さと不満を満たさなかったために、お前は私をある時は愚か者と、またある時は盲人とか嫉妬深い人とか殺人者とか敵対者とか継母とか誹っていた。
9. Cf. David Robinson, ed. *Concordance to the Good News Bible* (1976; rpt. The Bible Societies, 1983), pp. 796 - 797.

10. *Lydgate's Fall of Princes* Part III, p. 687を参照。Bergenは中英語 'fyndere' を現代英語の 'instigator' と訳している。
11. この語句に関しては, Erwin Panofsky, " 'Good Government' or Fortune: The Iconography of a Newly-discovered Composition by Rubens," *Gazette des Beaux-Arts*, 68 (1966), 311を参照。
12. Philippa Tristram, *Figures of Life and Death in Medieval English Literature* (London: Paul Erek, 1976), p. 141.
13. Henry Bergen, ed. *Troy Book* Part I - III (London: The Early English Text Society, 1906 - 1920). 以後, この作品からの引用はすべてこの版により, 巻と行数のみを記す。『英米文学辞典 第三版』(研究社, 1985年), 782ページによると, 『トロイの書』は1412 - 20年に創作され, 『没落』は1430 - 40年に創作されている。
14. Cf. *Troy Book*, I. 2258 - 62; *Fall of Princes*, I. 4553 - 57.
15. Larry D. Benson, general ed. *The Riverside Chaucer*, third edition (Boston: Houghton Mifflin Co., 1987), p. 363, ll. 1259 - 1264.
16. Cf. Rosemary Ellen Guiley, *The Encyclopedia of Witches and Witchcraft* (New York: Facts on File, 1989), p. 92: "As agents of the Devil, demons became associated with witches during the Middle Ages..." その他, 池上俊一『魔女と聖女』(講談社現代新書, 1992年), 13 - 56ページを参照。
17. 例えば, Ovid, *Tristia* V. viii. 8; Ovid, *Ex Ponto*, II. iii. 56 and IV. iii. 31; Ovid, *Consolatio ad Liviam*, 375; Ovid, *Fasti*, vi. 573 and 775; Claudian, *Panegyricus*, XXVIII, 3; Seneca, *Octavia*, 452; Plaustus, *Pseudolus*, 678; Juvenal, *Satura* XIV. 316 and 366; Horace, *Odes* I. XXXV. 1を参照。以後, ローマ古典文学からの引用はすべて Loeb Classical Library 版による。
18. *Fall of Princes*, I. 4537, 6071, III. 153, 203, IV. 781, 998, 3351, V. 566, VI. 203, VIII. 470, 2868, IX. 3530.
19. See *The Riverside Chaucer*, p. 178. 使用した語句はChaucer, *The Franklin's Tale*の Prologue 726行目に基づく。
20. Gladys Doidge Willcock and Alice Walker, eds. *The Arte of English Poesie* (1936; rpt. London: Cambridge University Press, 1970), p. 148.
21. *Goddess Fortune in John Lydgate's Works*, p. 49.
22. Cf. Chaucer, *Boece*, Book IV, Prosa 6 in *The Riverside Chaucer*, pp. 450 - 454.
23. 例えば, ダンテ『神曲』地獄篇第七歌, 平川祐弘訳 (河出書房新社, 1992年), 26 - 29ページを参照。
24. Patchは, 運命の哲学体系を述べるなかで, 異教神運命の女神の抹殺 (the annihilation of Fortuna), 異教神運命の女神とキリスト教との折衷 (the Compromise), キリスト教化

- した運命の女神 (the Christian Fortuna) に分類し、それぞれの見解の代表として聖アウグスティヌス、ボエティウス、ダンテを挙げている。Cf. H.R. Patch, "The Tradition of the Goddess Fortuna in Medieval Philosophy and Literature," *Smith College Studies in Modern Languages* Vol. III, No. 4, 179 - 235.
25. 例えば、運命の女神と星回りの超自然力との関係については、Willard Farnham, *The Medieval Heritage of Elizabethan Tragedy* (Oxford: Basil Blackwell, 1956), pp. 109 - 110を参照。運命の女神と天の支配者ジュピターとの関係については、Jerold C. Frakes, *The Fate of Fortune in the Early Middle Ages* (Leiden: E. J. Brill, 1988), p. 15を参照。その他、Jupiterに冠せられるべき形容辞 "omnipotens" (=almighty) (Virgil, *Aeneid*, II. 689, IV. 206, V. 687, IX. 625) がFortunaに見られることもこの一例である: "Fortuna omnipotens" (*Aeneid*, VIII. 334)。
26. *Fall of Princes*, III. 313 - 314, III. 645 - 651, III. 652 - 658 and III. 673 - 675. これらの用例もリドゲイトの創作的見解である。比較考察によれば、原典にも仏語訳にも、中英語の 'goddesse' に相当するラテン語 'dea' および中世フランス語 'Déesse' の使用は認められなかった。
27. H. R. Patch, *The Goddess Fortuna in Mediaeval Literature*, p. 33.
28. これはLydgateの運命論に一貫性がないという見方になる。この指摘については、Joseph R. Strayer, ed. *Dictionary of the Middle Ages* (New York: Charles Scribner's Sons, 1985), Volume 5, p. 146を参照。
29. この見解は、日本英文学会第64回大会 (1992年5月24日、西南学院大学にて開催) において発表された黒瀬保先生の「<sup>タイプ</sup>神型論・擬似遺伝子組み換え論—運命の寓意変化の場合—」の主張に基づく。詳細は「第64回大会資料」の50ページを参照。その他、Patchが「愛の運命」「旅の運命」「海の運命」「戦の運命」「名声の運命」「個人的運命」「公共の運命」「時の運命」「死の運命」に分類した運命の女神の信仰様式 (カルト) の系統化に基づく。Cf. H.R. Patch, *The Goddess Fortuna in Mediaeval Literature*, pp. 88 - 122.
30. Fortuneの手に関するブルミエフェの翻訳は次の通りである: "fortune en son corps auoit cent mains et autretant de bras pour donner & pour tollir aux hommes les biens mondains et pour abatre en bas & pour leuer en hault les hommes de ce mond." (世俗物資を人に与えては取り戻すために、あるいは、俗人を高く持ち上げては低く転落させるために、彼女の身体には百本の手と同数の腕があります。) Cf. *Lydgate's Fall of Princes* Part IV, p. 246.
31. Fortuneの称号に関するブルミエフェの翻訳は次の通りである: "Fortune...qui comme chamberiere donne et depart aux hommes et aux femmes les bienheuretez mondaines" (侍女のように男にも女にも世俗物資を分配する運命の女神) Cf. *Lydgate's Fall of Princes* Part IV, p. 246.

32. 例えば, Ammianus Marcellinus, *Rerum Gestarum Libri Qui Supersunt* XV. 5. 1 “Fortuna moderatrix humanorum casuum” (= arbitress of human chances); Plautus, *Poenubus*, 973 “Fortuna...adiutrix” を参照。
33. その他, 例を挙げると, リドゲイトはmonsterとするに適した寓意要素として ‘Sirenes’ (VI. 69), ‘A monstrous beeste departed manyfold’ (IV. 2872) を創出し, 悪魔と位置付けるに適した寓意要素として ‘A slidyng serpent’ (IV. 2873) を創出している。半人半鳥の海の精 ‘Sirenes’ に関しては, 今回の比較考察によって, リドゲイトの独創的な発想によるものと判明した。‘A monstrous beeste departed manyfold’ とアダムとイヴを楽園から追放させた蛇を連想させる ‘A slidyng serpent’ に関しては, H. Bergenがリドゲイトの独創的発想によるものと指摘している: “The reference to Fortune (2871 ff.) is Lydgate’s.” Cf. *Lydgate’s Fall of Princes* Part IV, p. 220.

(2002年5月7日受理)